

國學院大學學術情報リポジトリ

プロジェクト活動紹介「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001788

「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

プロジェクト責任者 井上順孝

1. プロジェクトの概要

本プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」は、2010年度から3年計画で発足し、本年度は2年目にあたる。まず本プロジェクトは2009年に正式に運用が開始された國學院大學デジタル・ミュージアムについて、研究開発推進機構内の諸機関や図書館などと有機的に連携しながらその円滑な運営を図るものであり、これまでの運用に加えて、更なるユーザビリティの向上のためにシステム面の整備・改良を進める。

また、大学の学術資産をデジタル化し、データベースとしてデジタル・ミュージアムに組み込んで発信することによって更なる内容の充実を図る。日本文化研究所や研究開発推進機構内の諸機関によるものだけではなく、全学規模での多様な研究成果を対象として公開を進め、かつそれらを例えば教育など研究以外の方面へと活用していくことも念頭に置く。

これらに加えて、本プロジェクトでも独自のコンテンツを作成していく。例えば既にデジタル・ミュージアム上で運用している Encyclopedia of Shinto (以下 EOS) について、これのさらなる拡充を図り、日本宗教と神道に関する日本語の論文を他言語に、あるいは他言語の論文を日本語に翻訳することによって日本と海外の研究者の知識の共有を図る双方向翻訳を行う。さらに、宗教文化教育に関する動画コンテンツについて、その制作体制を整備した上で、実際に制作を進めて

いく。この動画コンテンツについて、これは後述する宗教文化教育とも結びつくものであり、本年度10月に実施する国際研究フォーラムでも動画コンテンツの問題に焦点を合わせる。

なお、関連分野への展開について、特に宗教文化教育・宗教文化士制度と連携していく。本プロジェクトの2010年度の活動において、同年度が最終年度となった科学研究費補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」(研究代表者・星野英紀大正大学教授)と協力して宗教文化教育に関する事業を行っており、また2011年1月9日には「宗教文化士」資格の認定制度の運営を担う「宗教文化教育推進センター」(CERC、サーク)が日本文化研究所内に設置され、2011年11月に同認定試験の第1回が行われる予定となっている。さらに、上述科研を継承する内容であり、本プロジェクト代表者である井上順孝を研究代表者とする科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」が2011年度より4年間の計画で採択された。これらと緊密に連携を取りながら本プロジェクトは事業を推進していく。

このように、本プロジェクトは一方においてデジタル・ミュージアムの整備・運営を行い、他方において、制作体制の整備を含めて独自コンテンツの更なる拡充を図っていくものである。以下ではまず本プロジェクトの2010年度の成果を簡単に紹介し、その上で2011年度の計画について概要を記す。なお、2011年度のプロジェクトメンバーは以下の

通りである。

責任者 井上順孝

分担者

平藤喜久子、星野靖二、塚田穂高（専任教員）、ノルマン・ヘイヴンズ、黒崎浩行、斉藤こずゑ（兼任教員）、市川収、カール・フレレ（客員研究員）、市田雅崇、李和珍、ヤニス・ガイタニディス（PD研究員）、今井信治（研究補助員）、ケイト・ナカイ、土屋博、星野英紀、山中弘（客員教授）、マシュー・チョジック、キロス・イグナシオ、小堀馨子、エリック・シッケタンツ、高橋典史、ジャン＝ミシェル・ビュテル、山梨有希子（共同研究員）

2. 2010年度の成果

(1) 機構全体に関わる成果

◇國學院大學デジタル・ミュージアム関連

2009年度に正式に稼働したデジタル・ミュージアムについて、新機能の組み込み等を行いながら全体の改良を進めた。新機能の一つは地図連携機能であり、これは数値データとして保持されている緯度・経度情報をグーグル・マップの提供する地図上に表示するというものであり、例えばある神社の位置を地図上に表示することが可能になる。2009年度末にシステム上に実装されたのを受けて、2010年度は先行して同機能を組み込んだ「神道・神社史料DB」と「祭祀遺物出土遺跡DB」の担当者と意見交換しながら細かい調整を加え、他のデータベースにおいてどのように活用することができるのかについて議論した。

もう一つの新機能は絵巻物のような長い一枚絵を表示するシステムであり、画面上部に長い一枚絵のサムネイルを表示し、その一部分を選択すると、画面中央にその部分の拡大画像が表示されるという表示機能を設定し

た。これについては、絵巻物などを収録している「図書館デジタル・ライブラリー」に先行して組み込んだ。

また、画面表示の改良について、データのエントリ項目（例えば本の書名の項目）では一枚の画像を表示し、そこからそのエントリに含まれる複数の画像（例えばその書に含まれる頁ごとの画像）を表示する画面へと遷移する仕組みを構築した。これによって、書籍や資料群など、一つの意味のあるまとまりとして複数の画像資料を含むデータ群を取り扱いやすくなった。

更に、高精細画像を表示させる機能をシステムに組み込むことを念頭に置いて、それを容易にするソフトウェアについてシステム開発者から説明を受けた。これについては引き続き2011年度も検討していくことになる。

◇国際研究フォーラム「イスラームと向かい合う日本社会」

2010年10月3日に、國學院大學学術メディアセンター1階の常磐松ホールにおいて、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所と科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」の共催によって、国際研究フォーラム「イスラームと向かい合う日本社会」が行われた。

同フォーラムは10時から17時半まで行われ、5つの発題に続いて総合討議がなされた。発題者とタイトルは次の通りである。

第1セッション：三木英（大阪国際大学教授）「モスクが来た街」

第2セッション：イサム・ハムザ（エジプト、カイロ大学教授）「イスラームは日本の宗教になり得るか」

第3セッション：サリー・ユジェル（オーストラリア、モナシュ大学教授）“Is Islam part of the problem or solution?”
[イスラームは問題なのか解決なのか]

第4セッション:グリット・クリンカマー(ドイツ、ブレーメン大学教授)“Germany - Problems and developments of religious and cultural Integration”[ドイツー宗教および文化統合の問題と最近の状況]

第5セッション:中西俊裕(日本経済新聞社編集委員)「イスラム世界との絆」

これらを受けて、コメンテーターである師岡カリーマ・エルサムニー氏からコメントがあり、その後に井上順孝の司会で総合討議を行った。

同フォーラムには100名近くが参加し、充実した発表を受けて活発な議論がなされた。なお、同フォーラムを1時間に編集したものが、精神文化映像社の番組としてスカイパーフェクTVの216chで2011年1月12日と26日に放送された。

また、同フォーラムに関連して前日の2010年10月2日に、講師に小杉泰氏(京都大学教授)を招いて公開学術講演会「現代イスラームと日本社会」を行った。この講演会は研究開発推進機構の主催によるものであるが、同フォーラムの基調講演としての性格を持つものであった。

◇公開講演会「観光と宗教」

2010年12月11日に、國學院大學学術メディアセンター1階の常磐松ホールにおいて、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所と科学研究費補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」の共催によって、講師に井門隆夫氏(ツーリズム・マーケティング研究所主任研究員)を招いて公開講演会「観光と宗教」が行われた。

講演会は13時から14時20分まで行われ、井門氏は、ツーリズム・マーケティング研究所の経験に基づいて、宗教文化と観光が具体的にどのようにつながっているかということに

ついて、実際の事例を示しながら論じた。

また引き続き講演後の14時30分から17時45分まで、「宗教文化教育の教材を探る」というテーマでワークショップが行われ、教材開発について議論がなされた。この宗教文化教育の教材開発については、本プロジェクトの2011年度の活動でも継続して考究していくことになる。

(2) プロジェクト独自の成果

◇EOSの拡充

2010年度は、引き続きEOSの新システム上への移行を進めた。2009年度中からの懸案であった項本文の英文の見直しの反映作業について、蓄積分についてはこれを完了させた。しかし、見直し作業自体は今後も継続して行っていくことになる。

本文以外のコンテンツの拡充も引き続き行われた。まず年表の英訳が進められており、また神道あるいは日本文化・日本宗教についてあまり詳しくない外国人を対象とし、そうした人々が画像を通じて神道の基本的な知識を学ぶことを目的としたウェブサイトであるImages of Shinto: A Beginner's Pictorial Guideの内容の充足を図った。現在のところ、境内図、社務所、神殿内部、年中行事、人生儀礼の概要などを示した計6点のオリジナルのイラスト・図を作成し、それぞれについて画面上でイラスト・図内のものの名称と簡単な解説を読めるようにしている。

更に、EOS本文の一部の韓国語への翻訳も引き続き進められた。2010年度は「第四部 神社」の翻訳が完了し、これをどのように公開するのかについて議論した。

◇双方向翻訳

2010年度は次の3点の翻訳を行った。日本語から英語へ2点、英語から日本語へ1点である。

・日本語から英語へ翻訳された論文

今井信治「アニメ『聖地巡礼』実践者の行動に見る伝統的巡礼と観光活動の架橋可能性—埼玉県鷲宮神社奉納絵馬分析を中心に—」(英訳 Anime “Sacred Place Pilgrimages”: The potential for bridging traditional pilgrimage and tourism activities through the behavior of visitors to anime “sacred places” -- An analysis of “votive offering tablets” (ema) at Washinomiya Shrine, Saitama Prefecture 翻訳者: GAGNE, Isaac)

荒川裕紀「西宮神社十日戎開門神事における歴史的変遷」(英訳 Historical Transition of the TŌKA-EBISU “Open Gate” Ceremony in Nishinomiya Shinto Shrine 翻訳者: STARLING, Jessica)

・英語から日本語へ翻訳された論文

Mark R. Mullins, “How Yasukuni Shrine Survived the Occupation: A Critical Examination of Popular Claims” (邦訳「いかにして靖国神社は占領期を生き延びたのか——通俗的主張の批判的検討——」 翻訳者: 齋藤公太)

◇教派神道及び神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化

旧日本文化研究所時代に収集した教派神道の教団資料について、かねてからデジタル化の作業が進められていたが、デジタル・ミュージアムの正式稼働を受けて、新システム上での公開に向けてデータの整備を行っている。画像データのデジタル化については2010年度中にほぼ終了しており、加えて公開方法や画像データに付与するメタデータなどについて検討した。

また神道系教団より委託された教団基礎資料について、教団から許可を受けて2008年度からデジタル化とデータベース化を進めているが、2010年度もこの作業を継続して行った。

◇現代宗教に関する資料・データの収集とそのデジタル化

宗教文化士制度と関連して、主に宗教教育、宗教文化という観点から、現代宗教に関する資料・データを収集している。2010年度も引き続き、世界遺産と宗教に関するデータベース、映画と宗教に関するデータベース、高校の教科書にみられる宗教文化関連の用語データベース、宗教文化を学ぶに適した博物館・美術館のデータベースなど、幾つかのデータベースの構築を進めた。

◇学生に対する宗教意識調査(第10回)の実施

2010年度に学生の宗教意識についてのアンケート調査を「宗教と社会」学会・宗教意識調査プロジェクトと合同で実施し、2011年2月に報告書を刊行した。この調査は1995年以来、日本文化研究所のプロジェクトと「宗教と社会」学会のプロジェクトが合同で行ってきており、今回が第10回となる。質問項目のうち半分程度は初回から通して同じものであり、この15年の変化を調べることができる貴重な資料となっている。

◇科学研究費補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」(研究代表者: 星野英紀大正大学教授)との連携

科学研究費補助金によるこの研究は、大正大学の星野英紀教授を研究代表者として2008年度から3年計画(最終年度:2010年度)で行われており、研究分担者としてプロジェクトメンバーの井上順孝、黒崎浩行、平藤喜久子の3名、また連携研究者として同じく星野靖二と、学術資料館より加瀬直弥の2名が加わっている。同科研の目的は大学における宗教文化教育の実質化を図ることであり、具体的には宗教文化士制度の実現を目指しているが、本プロジェクトはその前身である「デ

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクト（2007～2009）から一貫して同科研と連携して事業にあたってきた。

2010年度は同科研の最終年度であったため、成果のまとめとなるシンポジウムやフォーラム、シンポジウムが開催され、また報告書が作成された。加えて2011年1月9日に同科研の成果報告会が行われ、かつ同日に「宗教文化士」資格の認定制度の運営を担う「宗教文化教育推進センター」（CERC、サーク）が日本文化研究所内に設置された。

3. 2011年度の研究計画など

◇國學院大學デジタル・ミュージアム関連

2009年から正式に稼働している國學院大學デジタル・ミュージアムについて、2011年度も引き続きシステム面の整備、コンテンツ面での拡充を図る。これまでデジタル・ミュージアムの基本的なシステムは、各データベースの実務担当者を中心に組織したワーキンググループにおける協議を通じて構築してきており、本プロジェクトはこのワーキンググループの連絡調整、運営を行ってきた。2011年度も引き続きワーキンググループにおける検討を通じて、使用者とデータベース作成者の両者にとってより使いやすい方向へシステムを改良していくことを目指す。また従来通り、新規データベースの追加・公開については、個別の申請を受けて検討する。

コンテンツについては、デジタル・ミュージアムに収録している各データベース個別の改良作業に加えて、本プロジェクト独自のコンテンツ制作も進める。本年度は特に動画素材の制作・活用に焦点を合わせており、これは動画の制作に加えて、制作環境を構築することをも含む。これはさらに、後述する宗教文化教育の教材開発と本年度の国際研究フォーラムとも関連しており、合わせて総合的に展開していく。

また、研究開発推進機構における研究成果のデジタル化とアーカイブの作成について検討する。これは広く国内外において研究・教育面で活用してもらうためであり、本年度は、今後の研究成果をどのように体系的にデジタル化していくか、また旧日本文化研究所の紀要のように既にデジタル化されているデータを合わせてどのように全体を公開・活用していくかについて議論する。これに関連して、現在図書館を中心に國學院大學の機関リポジトリ作成が検討されているため、これと連絡しつつ、準備を進める。

◇EOSの拡充

EOSについて、更にその内容を拡充していくが、本年度は以下のことを重点的に行う。

まずデジタル・ミュージアム上の新システムへの完全な移行を図る。EOSは当初単体のデータベースとして構築されたが、デジタル・ミュージアム稼働時に新システムへと移行した。現在コンテンツの改善は新システム上でなされているが、音声再生機能等など、まだ新システムへと引き継ぐことができていない要素があったため、こうした問題を解決して完全な移行を図る。

また現行の内容の吟味・改善を引き続き行う。EOSは多くの翻訳者の協力によって構築されているため、時間をかけて全体の統一性を確保していかなければならず、内容の改善についても適宜行っていく。

さらに、懸案である年表の翻訳作業を引き続き進め、日本文化・日本宗教についてあまり詳しくない外国人を対象とした入門用のサイトである Images of Shinto : A Beginner's Pictorial Guide についてもさらなる充実を図る。

EOSの韓国語訳について、本年度は引き続き「第八部 流派・教団と人物」の翻訳を進める。既に翻訳が完了している「第四部 神社」については、公開方法を検討した上で

新システム上に組み込み、公開する。

◇双方向翻訳

日本宗教と神道に関係する論文の相互翻訳について、2011年度も4本程度の論文の翻訳を予定している。対象となるのは広く日本文化に関わる論文のうち比較的最近に刊行・発表されたものであり、その中から翻訳・発信の意義が高いと思われるものを選定する。中心となるのは日本語論文の英語訳と英語論文の日本語訳であるが、韓国語などそれ以外の言語との双方向翻訳も念頭に置いている。

また既に20本弱の論文が成果として公開されているが、これをよりアクセスしやすい形で公開・発信する方法について、現行の形式の再構成を含めて議論していく。

◇教派神道及び神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化

旧日本文化研究所時代から現在まで長期にわたって、教派神道（神理教・神道修成派など）や神道系新宗教関係の基礎的文書資料を大量に蒐集してきた。そのうちの一部については既に翻刻がなされたり、内容が研究論文で紹介されたりしているが、以前から将来的な公開を目指してデジタル化の作業を進めてきており、これを引き続き行う。文書を画像データとしてデジタル化する作業については既にその大半を終了しているため、本年度の課題はその画像データにメタデータを付与して公開することである。まず神理教関係資料のデータを公開し、また神道修成派関係資料のデータについても公開の準備を進める。

また、神道系教団より委託された教団基礎資料（書簡類約二万点）について、引き続きそのデジタル化作業を進める。資料整理について一定程度的見通しがついた時点で、資料内容の分析に着手する。

◇宗教文化教育の充実のための教材作成

2010年度に引き続き、宗教文化教育・宗教文化士制度と連携し、特に動画による教材の制作について、制作環境の整備を含めて重点的に取り組む。

また2011年1月9日に「宗教文化教育推進センター」（CERC、サーク）が日本文化研究所内に設置され、同センターが「宗教文化士」資格の認定制度の運営を担うことになった。2011年11月に第1回の同認定試験が行われる予定であるため、本プロジェクトも同事業に協力していく。

さらに、本年度において、本プロジェクト代表者である井上順孝を研究代表者とする科学研究費補助金基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」（2011～2014年度）が採択された。本プロジェクトは同科研費と連携して教材開発を進める。

具体的には、宗教文化の学習に有益な博物館や映画、あるいは世界遺産や参考文献などについてデータベースを構築して公開し、かつ「動画」を用いたオンライン教材の制作やまたその発信方法について、調査・研究を実施する。

◇国際研究フォーラム

本プロジェクトは国際的な研究交流の推進を重視しており、毎年少なくとも1回は本研究所の主催で国際研究フォーラムを開催し、研究者の国際的ネットワークをより発展させることを目指している。

本年度は、宗教文化教育における動画の活用について議論するため、「デジタル映像時代の宗教文化教育一開かれたネットワークによる取り組み」というテーマで10月16日に国際研究フォーラムを開催する予定である。予定されている発題者5名とコメントーターは以下の通り。Erica Baffelli（ニュージーランド、オタゴ大学）、Alan Cummings（イギリス、ロンドン大学）、岩谷彩子（広島大学）、織田雪江（同志社中学校・高等学校）、

平藤喜久子（國學院大學）。コメンテーター： ルマン・ヘイヴンズ（國學院大學）が務める。
岩井洋（帝塚山大学）。司会は黒崎浩行とノ